（2）松川浦サイト

毎年調査結果票　2010（平成 22）年度

(1) サイト名	松川浦（福島県相馬市）	略号	TFMTK
(2) 海域区分	④中部太平洋沿岸		
(3) 緯度・経度（WGS84）	A エリア（鵜の尾）： 37.8218 N, 140.9845 E		
	B エリア（磯辺）： 37.7807 N, 140.9800 E		
(4) 調査年月日	2010 年 5 月 19 日		
(5) 調査者氏名	サイト代表者：鈴木孝男（東北大学大学院生命科学研究科）		
	調査者：鈴木孝男・佐藤慎一・鳥居　洋・千葉友樹（東北大）、内野今日子（東邦大学東京湾生態系研究センター訪問研究員）		
	調査協力者： －		
(6) 環境の概要	A エリア：潟湖干潟の通水路に近い位置にあり、入江状になった干潟。入江の最奥部は泥が混じる。潮上帯には小面積の塩性湿地があり、潮下帯の水路沿いにはアマモ場が広がる。干潟には海苔棚がある。		
	B エリア：松川浦の最奥部に位置する干潟で、一帯に平坦な干潟が広がる。潮間帯下部は砂泥質で、底土を掘ると少し還元的な色を呈する。潮間帯上部にはパッチ状の狭いヨシ原が存在する。小河川の流入があり、ところどころに小規模のイガイ礁やカキ礁が見られる。岸辺にはゴミの打上げが多い。		
(7) 底生生物の概要・特徴	A エリア：潮間帯上部ではホソウミニナとマツカワウラカワザンショウ（未記載種）が優占し、いずれも高密度で生息していた。周辺にはアシハラガニ、コメツキガニ、チゴガニ、ヤマトオサガニが生息するが、調査時においては地表にでている個体はまだ少なかった。一帯にはニホンスナモグリのマウンド（巣穴から運び出された砂が盛られたもの）が見られ、塩性湿地にはフトヘナタリとウミニナが生息していた。潮間帯下部ではホソウミニナが優占するがユビナガホンヤドカリも比較的多い。少し地高の高い所にはマツカワウラカワザンショウが高密度で見られた。また、アナジャコの巣穴が見られた。周辺にはアナアオサの打上げがあった。		
	B エリア：潮間帯上部ではホソウミニナが優占するほか、マツカワウラカワザンショウやヤミヨキセワタ（未記載種）が見られた。また、ムラサキイガイやマガキの小さな礁がところどころに存在していた。潮間帯下部ではカワアイとウミニナが低密度ではあるが生息していた。マツカワウラカワザンショウ、ヤミヨキセワタ、コメツブガイなどが表層で見られたほか、埋在生物としてはオキシジミが比較的多かった。		

(8) 底生生物の変化	A エリアの塩性湿地に生息するフトヘナタリは 2009 年度よりも多く認められた。B エリアでは、2008 年度には 1 個体が見つかったものの、2009 年度には出現しなかった外来種のサキグロタマツメタが今年度は数個体発見されたことから、松川浦全域に分布が広がったと考えられる。ヤミヨキセワタが昨年よりも多く、全域で見かけられた。また、コメツブガイが潮間帯下部で比較的多く観察された。A エリアの塩性湿地に生息するフトヘナタリは 2009 年度よりも多く認められた。B エリアでは、2009 年度に見られなかった外来種のサキグロタマツメタが今年度は数個体発見されたことから、松川浦全域に分布が広がったと考えられる。ヤミヨキセワタが 2009 年度よりも多く、全域で見られた。また、コメツブガイが潮間帯下部で比較的多く観察された。
(9) その他特記事項	A エリアでは、海苔棚の面積が 2009 年度よりもさらに増加した。残っている海苔棚にはまだアオノリが付着していた。また、アナアオサの打上げは、調査地点ではあまり多くはなかった。 外来種のサキグロタマツメタの駆除は継続して行われているが、アサリの潮干狩場周辺が主体であり他の場所では駆除が行き届いていないこともあって、全体で見ると生息数が減少するまでには至っていないように思われる。また、外来種のシマメノウフネガイはそれほど多くはなかった。

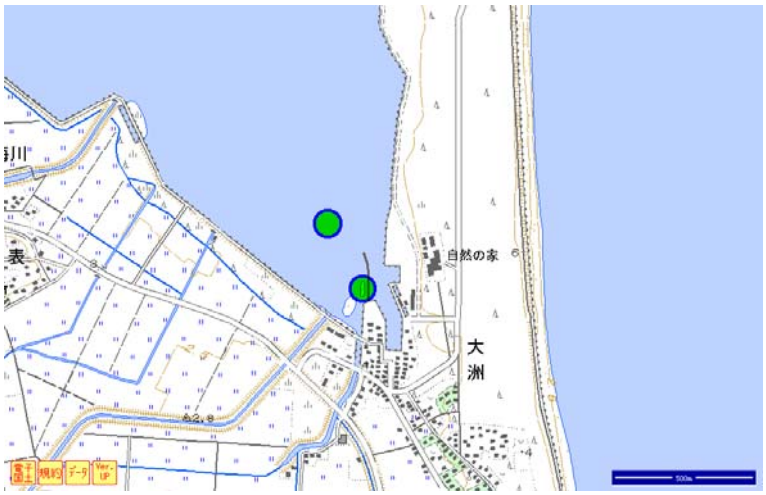
調査地の地図

位置図（広域地図）

円内に調査地がある。
上：A エリア（鵜の尾）
下：B エリア（磯辺）
スケールは 5 km を示す。

位置図（詳細地図）
A エリア

円内に調査地がある。
左：潮間帯下部（AL）
右：潮間帯上部（AU）
スケールは 500 m を示す。



位置図（詳細地図）
B エリア

円内に調査地がある。
左：潮間帯下部（BL）
右：潮間帯上部（BU）
スケールは 500 m を示す。

調査地の景観、生物写真等

A エリア（鵜の尾）

B エリア（磯辺）

ホソウミニナ

マツカワウラカワザンショウ

ヤミヨキセワタ

カワアイ

オキシジミ

サキグロタマツメタ